

貨幣に記されたカローシュティー文字の字形表

中村雅之

カローシュティー文字の簡便な字形表としては、三省堂『言語学大辞典』の「カローシュティー文字」の項に掲載されたものがある。そこでは前3世紀のアショーカ王碑文と後3～4世紀のニヤ文書の字形を載せているが、貨幣における字形は挙げられていない。本稿では基礎的な作業として、古代文字資料館が管理している貨幣に見られる字形を整理してみた。

a	𑀅					
e	𑀆					
ki	𑀇					
kra	𑀈					
kha	𑀉					
ga	𑀊					
ja	𑀋 𑀌					
ta	𑀍 𑀎					
ti	𑀏					

tra	𐌊					
da	𐌋					
dra	𐌌					
dha	𐌍					
dhra	𐌎					
na ṁ	𐌏					
pa	𐌐					
pu	𐌑					
ma	𐌒					
mi	𐌓					
me	𐌔					

ya	ʌ					
yi	ʏ					
ra	ʀ					
la	ʎ					
li	ʟ					
vu	ʋ					
špa	ʃ					
ša	ʂ					
sa	ʂ ʂ					
ha	ʂ ʂ					
he	ʂ					
ho	ʂ					

カローシュティー文字では、基本字母は母音「a」を内包したものと見なされる。これはブラーフミー文字などインド系文字一般の特徴と一致する。他の母音は基本字母に以下の記号を付加して表される。母音の長短は少なくとも字形上では区別されない。

「i」: 交差する縦線。「ki」「ti」「mi」「yi」「li」を参照。

「u」: 下部に左下がりの横線(「vu」)か、丸め(「pu」)。

「e」: 上部に、交差しない縦線。「e」「me」「he」参照。

「o」: 下部に、交差しない縦線。「ho」参照。

鼻母音(anusvāra、「ṁ」または「ṃ」と転写される)は通常、下部に小さな「ma」を付加して表されるが、貨幣では明瞭にそのように記されたものは確認されていない。上表の「na ṁ」のように短い横線が付加される。そのため、資料の状態によっては、これがanusvāraであるか、ただのフットマークであるかは識別しがたい場合がある。

フットマークとは、母音記号(i、u、e、o)が付かない基本字母にのみ付加されるもので、母音「a」を明示したものとも考えられるが、付加されない場合も多い。おおむね下部が縦の直線である時に、トメやハネの形で表れるが、バリエーションが多い。貨幣では、「ta」や「sa」に見られる底辺の台が一般的である。「ta」と「ra」はよく似た字形なので、事実上フットマークのあるなしで区別される場合も多い。上表の「da」の中に下部が左に湾曲した字形があるが、これもフットマークの一種と見なすべきであろう。

貨幣のカローシュティー文字が他の資料と大きく異なる点は、ドット(点)のフットマークが現れることである。「ma」「ha」「dra」など、下部が曲線である場合に用いられる。ドットのフットマークがなぜ貨幣にのみ用いられるのかは不明であるが、フットマークの目的が母音「a」の明示にあるとするならば、ドットはその明瞭さの故に最もその役割にふさわしいと言える。